慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	< 随想 > 言語, その豊かな学びを求めて : ベルリン・ 都羅山・ 板門店の情景から
Sub Title	Seeking rich language learning : from experiences in Berlin, Dorasan and Panmunjom
Author	山下, 誠(Yamashita, Makoto)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.62 (2022.) ,p.41- 48
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	境一三教授退職記念号 = Sonderheft für Prof. Kazumi Sakai
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20220331-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

この著作物は著作権法によって保護されています／ This content is protected by the Japanese Copyright Act

＜随想＞
言語，その豊かな学びを求めて
――ベルリン・都羅山・板門店の情景から

山　下　　誠

前夜からの準備のせいで，いささか睡眠不足だったが，非力ながら責を果たした安堵もあったのだろう，5 日間に及ぶ「外国語学習のめやす」研修の懇親会場は，多くの招待者で殊更に華やいでいるように見えた。そこで，私は境さんに出会った。境さんは，ビールグラスをおいしそうに傾けながら，私の言葉足らずなプレゼンの核心をとらえ，的確なコメントをくださった。明晰かつ率直，それが境さんの第一印象だった。私のドイツ語は，専攻が地理学だった関係でかじったものの，ほとんどモノにはならなかったことなど，愚にもつかぬやり取りをするうちに，話題は，私が訪れた 80 年代のベルリンに及んだ。

前夜にミュンヘンを発った列車は，ガクッと音をたて，未明の駅に停車した。深い闇の中，乗り降りする者は誰一人いない。西側から東側に越える「国境」に住人はなく，都市はおろか集落さえありえないからだ。やがて，コンパーメントのドアを無作法に開け現れたのは，「ロシア帽」をかぶった屈強の兵士だった。それは，画面から飛び出して，そのまま眼前に映し出されている映画のワンシーンのようで，私は，しばしロシア帽氏の無表情に見とれていた。そこに投げ出されたのは私のパスポートで，見れ

ば無造作にスタンプが押されている。そうか，これが『地球の歩き方』に出ていた，あの通過査証か。それにしても，この単なる無言を通り越した不愛想さこそが，社会主義の象徴なのか……どれほど待っただろうか，列車は徐に動き出した。しかし，そこで眠り込むわけにはいかなかった。なぜなら，通過査証しか持たない私が降りることができるのは，この先，西ベルリンのZOO駅だけで，そこを降り逃すと列車はすぐに再び東領内に入り，無査証の私は，壁の向こうの世界に不法入境者として放り出されてしまうからだ。油断禁物だ。

果たして無事にZOO駅で列車を降り立った私は，3日間，西ベルリンに滞在した。そこは，前夜乗ってきた列車が，あの国境で同時に時空をも超越してしまったかのような，不思議なところだった。東ドイツという国家のある一点に，周囲から隔絶した西側の町が存在する，絶海の孤島ならぬ，絶陸の孤都市。

翌日は，いよいよ今回の旅の主眼，東西越壁の敢行だ。唯一，東西ベルリンを結ぶ公共交通手段であるUバーン（地下鉄）は，東領内であるが故に廃止となった，無人の駅をいくつか通過した後に，やっと，検問所のあるフリードリッヒシュトラーセ駅で停車する。そこで，あの国境の係官と瓜二つの兵士が，無造作に投げ出す一日査証を受け取った私は，地上につながる階段を，段ごとに踏みしめながら，恐る恐る上っていった。そして，最後の一段を上って，心の中で呟いた。「こここそが，念願していた壁の向こうの地なのだ」と。

そこは，東ベルリンきっての“目抜き”通りという触れ込みだったが，前々夜まで滞在していたミュンヘンに比べるとおそろしく見劣りのした西ベルリンの街並みでさえ，そこそこ立派なものだったではないか，と思えてくる。ここでは，すべてがくすんで見えて，空気さえが野暮ったいのだ。旧式のSバーンの車内には木製の椅子が並び，デパートと思しき店舗の衣料品売り場には，見るからに粗悪なズボンやシャツが無造作に並べられている。私には，そんな街を行き交う人々の日常を思い描くことができな

かった。社会主義の日常……その通りは，やがてベルリンの象徴，ブランデンブルグ門に至り，その先に進むことができないようになっている。そうか，あれが「壁」で，私は壁の向こうからこちらに越えてきたのだ……。ブランデンブルグ門前広場を行き交うのは，ごく普通の市民。そうか，ベルリン市民にとっての日常とは，決して越えては行けない世界が，壁の向こうに見えていることなのだと，深く納得した。少なくとも，そのつもりだった。しかし，それが単なる旅人の感傷に過ぎないことに気がつくまでに時間はかからなかった。ふと周りを見渡すと，誰も，壁の方に目を向けていないのだ。考えてみれば当たり前かもしれない，いくら見ても，向こうには行けないのだから。それは一幅の絵であって，もはや調度品なのだ。そして，絵の中の壁は，絵がある限りその中に存在し続ける。なぜなら，一度書き加えてしまった壁は，もう消せないのだ……はるか極東の地で，紙の上で学んだ歴史しか知らなかった私は，少なくとも自分が，そして今この広場にいる人々が生きている間は，この壁は存在し続けるという，ベルリンの，現実を，深く心に刻んだ。ところが，それから 5 年後の秋に，壁はあっけなく崩れた。消せるはずのない壁が，絵の中から消えたのだ。それは，あるはずがないと観念しながら，実は誰もが望んでいたことだった。

冷戦の終結，そして分断から統一へ，という歴史の怒濤が世界を飲み込んだ 1990 年。私が韓国語を学んでみようと思いったのは，そんな年の，気まぐれに寒がもどった春の朝のことだった。それは，「思い立った」としか言いようのない，何の前触れのない，突然のできごとだった。これといった動機もなく，実のところ，できれば近づきたくないとさえ思っていた韓国の言葉を始めることにしてしまった私だったが，始めてみると何のことはない，実に魅力的で，あれよという間に引き込まれていった。その魅力を，自らの言葉で表し切る力を持ち合わせないので，名典，小学館の『朝鮮語辞典』の前書きから，「朝鮮語が本来持っている，ダイナミックで

それでいて優しい表情」の一節を引かせていただき，まさにこれに尽きるとだけ，付け加えておくことにする。基，時に齢30代半ば，この時懐いた「こんな素晴らしい世界を，どうして私は今の今まで知らずに生きてきたのか」という悔恨の念こそが，やがて私に韓国語教育の道行きさせる原動力となるのだから，禍福は糾える縄の如しだ。

それから日が過ぎること2年，職場の同僚が，だしぬけに「韓国に行こう」と言い出した。曰く，「山ちゃんが通訳してくれるし」。いやはや，ビギナーの思い上がりは無敵だ。会話一つまともにできるはずもないのだが，乗りかかった船とばかり，まだ入国査証が必要だった時代に横浜山手の韓国領事館に通い，手作りのツアーが実現した。メンバー全員が社会科ゆえ，片やヨーロッパで冷戦が終わらんとする中で，なお厳在する朝鮮半島の分断が気になるのは，至極自然の成り行きだった。だから，韓国に着いた私たちは，何をもさておいて，板門店をめざした。

ソウルから，旅行社主催の専用ツアーバスに揺られること約1時間と少々，パスポートを持つ者だけが越えられる民間人統制線を越える。鉄条網に地雷警告標識は，旅人の緊張を高めるには十分だ。さらに，国連軍の警備区域のゲートをくぐり，しばらく行くと，空色の建物群が現れた。映画やニュースの画面でしか見なかった会議場の実物を目に前にする感慨はもちろんあった。しかし，それ以上に印象に刻まれたのは，そこからやや離れた小高い丘から望む，かなたの北韓の地の情景であった。しかと見えているが，越えては行けない，軍事分界線の向こうの地。ベルリンの壁はすでにないが，世界に唯一残された分断国家「朝鮮」の，その向こうとこちらを分け隔てる幅4キロの緑野の佇まいを，私たちは飽くことなく見つめていた。

下って2000年，金大中と金正日による歴史的な南北共同宣言により，朝鮮戦争で寸断された国鉄が軍事分界線近くまで復旧され，個人でも入れ

るようになった。友人からその報を聞いた私は，勇んで開通したばかりの京義線の列車に乗り込んだ。もっとも，首脳同士の共同宣言による緊張緩和は，いつ瓦解するかもしれない。だから，列車がめざす都羅山は，急ごしらえの臨時駅に違いないと，思い込んでいた。ところが，そこには，一日数本の専用列車だけが発着するだけの輸送需要にはあまりにも釣り合わない駅舎が，その大きく堅固な体を持て余していた。ホームの端で線路は途切れ，そのすぐ先は非武装地帯の緑野に吸い込まれているというのに，だ。ホームには，「ソウル方面」と並んで「平壌方面」と書かれた駅名標が，乗客でにぎわう日がすぐにでも来るかのように，屹立していた。私は，あの時のベルリンの，見えてはいても向こうに行けない壁が，今はもう存在しないことを想った。フリードリッヒシュトラーセ駅の検問所はなく，ロシア帽の兵士もいない。あのUバーンが通過していた無人駅にも，何事もなかったかのように人々が乗り降りしているはずだ。翻って目の前には，生活臭とは無縁の，映画のセットのように空洞だらけの駅。ここに，当たり前の日常を生きる人々が普通に乗り降りし，本来の喧騒と埃にまみれる日は，果たしていつ来るのだろうか。そして，その彼方の緑野は，新住人のための農耕地や都市として再生することに備えているようでもあり，無人であった50余年の間に本来の悠久の姿を取り戻した自然が，人の浸透を拒んでいるようでもあった。分断は，その軋みに人類の課題が露呈する。

私が教師になりたての頃，「第1次大戦後，国際連盟にかかわったジャン・モネは，経済から政治へ統合を進めることで，ヨーロッパを戦火の負の連鎖から解放しようとした」と知り，我が琴線をいたく振るわせた記憶がある。1982年，ベルリン体験の2年前のことである。だから，折りしも一般化しつつあった海外個人旅行の初の行先に，私はアメリカよりヨーロッパを，訪問地にノイシュバンシュタインよりベルリンを選んだのだった。この時の訪欧体験が，私の歴史観や社会科教師としての指導観の形成

に与えた影響は，きわめて大きい。しかし，外国語教育にかかわるなど露ほども予想していなかった当時の私が，後に CEFR として結実する言語政策策定のための研究が，この頃すでに欧州評議会で始まっていたことなど，知る由もなかった。よしんば耳に入ったとしても，注目をすることはなかっただろう。何しろ，その頃はまだ韓国語の学習さえ始めておらず，言語に対して殊更の関心をもってはいなかったからだ。私の認識は，「欧州統合は，経済から政治へ」という常識を超えることはなかった。

2006 年，「外国語学習のめやす」への参画をきっかけに，私の活動範囲が韓国語以外の言語に広がると，折に触れて CEFR を話題にのぼせるのを耳にするようになった。しかし，特にヨーロッパ言語の人々には，その傾向が強いように思われたのだが，彼らどうしが熱く語るその意義や重要性は，私にはどこか遠くに聞こえていた。日本・韓国とヨーロッパでは，置かれた状況が，あまりに違いすぎるのではないか。地続きのヨーロッパと海を隔てた東アジアという地理的環境しかり，言語間の距離しかり。彼の訪欧時のことだ。ベルギーで乗った列車はパスポートコントロールもなく，いつの間にか隣国オランダを走っていた。農地と都市の境が画然とする欧州ならではの景観に目を奪われていると，そこに若者が乗り込んでくる。そして，右を向いては母国語で，左の人とはドイツ語で話すかと思えば，正面の私の英語に耳を傾けるといった具合に，こともなげに言語をスイッチする彼らを目の当たりにしたのだが，その経験によっても私の疑念は裏打ちされたのだった。

そんなこだわりを解きほぐし，欧亜の差を止揚して言語のもつ普遍的なるものを浮かび上がらせてくれたのが境さんだった。後に，文部科学省委託のプロジェクトをご一緒する中で，境さんの講義を聞き議論を交わすにつれ，凝り固まっていた結び目は嘘のように解れ，いつしか私は，自分の言葉で複言語主義を語るようになっていた。境さんとの出会いは，僥倖以外の何物でもない。とはいっても，私の認識自体はいまだに十分なもので

はないが，熟達度と共通参照レベルの対応表ばかりが取り上げられ，CEFR 策定の基底をなす複言語主義の精神に目を向けようとしていないとしたら，少なくともそれは，私たちにとって大きな損失であるといわざるを得ない。

境さんはこの 3 月，定年で大学での職を辞するという。その折り目に論集が編まれるというので，謝意を込めて，非力をも顧みず小文を書かせていただくことにしたのだが，実は，私も同時に 40 年務めた高校現場を去る。同い年なのだ。

1956 年，日本が戦後復興から高度経済成長に突き進む歴史の折り目の年に，私たちは生まれた。戦争終結から 10 年が過ぎ，「もはや戦後ではない」と言われていた日本の地に。しかし，その時，ドイツは未だ戦後であり，朝鮮半島では戦後が始まったばかりであった。その実，休戦という，仮初めの戦後が。そして，ドイツは以後 30 年以上にわたり戦後であり続けたし，朝鮮半島に至っては未だ戦後のままである。こうした事実群を，ありがちな責任のあり方や取り方の議論に埋没させるとしたら，それは知の怠慢と言わざるを得ない。しかし，以前の自分はそういったことを，どこか他人事と感じて，聞き流していた。それが韓国語を学び始め，ついぞ今まで知ることのなかった新しい世界に触れてみると，世の中の見え方が一変したのだ。そして，それらの事実群も，自分事になった。このような内面の作用を，「心の化学変化」と題してさる新聞に投稿したら，今でいう「いいね」の放列を浴びた。記事では，高校生が韓国語の時間に見せる，生き生きとした反応の数々を綴ったのだ。「授業とは，学習活動をとおした生徒の変容の場である」という。私は，試行錯誤から始めた韓国語の授業の中で，他の教科では目にしたことのないような生徒の変容に，たびたび立ち会っている。その体験が私に，言語の学びの可能性を見出せしめた。K-POP スターに近づきたい一心で韓国語に群がる高校生も，その推しのアイドルが兵役のために活動を中断しなければならない現実を，いつの日

か自分事として受け止められるようになるのではないか……私が，高校教育の制度として，複言語主義にもとづいた豊かな言語の学びを実現すべく，非力を省みず様々な活動にかかわる所以である。

私が境さんとともに参画している「グローバル化に対応した外国語教育推進事業」も，文科省の委託から 5 年目を迎え，慶應大学外国語教育研究センターの事業として定着しつつある。手探りで始めた研究がここまで進んできたのは，長年ドイツ語教育に関する実践的研究に携わってこられた境さんから，高校教育に対する深い洞察にもとづいた，多くの的確かつ示唆に富む助言をいただいたからに他ならない。そして今，私たちはこれまでの成果をかたちにして，いよいよ世の人々と広く共有していこうとしている。これからも，いや，これからこそ，高校教育において言語の豊かな学びを実現するための道行きを，境さんとごいっしょできることを願っている。